

刊行にあたって―史料の解説を中心に―

千葉県文書館古文書調査員 加藤 時男

はじめに

明治二十二（一八九九）年四月、町村制施行により、近世以来の村々は消滅し、千葉県内では二四五七町村が合併して新しい三五七町村となり、源村も成立した。

これ以来、明治と昭和前期の源村は全国的にも著名な「模範村」であったため、村役場の関係書類も大切に保存・継承され、県内でも有数の村役場文書となっている。明治二十二（一八九九）年の源村成立以来、昭和二十九（一九五四）年の町村合併により源村が消滅するまでの五一八一四点の膨大な役場文書である。これらの文書は平成二（一九九〇）年、東金市・山武町と千葉県文書館との寄託契約に基づいて千葉県文書館で保存管理されている。以後、文書館による調査が続けられ『旧源村役場文書目録』第一集と第三集（平成十年と十三年）も刊行されている。『東金市史 史料扁四』（昭和五十七年）『山武町史 史料集（近現代編）』（昭和六十一年）には、これら源村役場文書からも多くの史料が採録されている。しかし、紙面の制約により、その一部しか掲載されていない。そこで「役場日誌」を中心としてここに紹介するものである。併せて、平成二十六（二〇一四）年、新発見の東金市上布田猪野裕子家文書から源村関係の文書も紹介した。猪野祐子家文書の発見経緯や文書の概要等については、のちに述べる。

これらの史料をもとに、山武市では平成二十八（二〇一六）年、『旧山武町の近現代―旧睦岡村・旧日向村・旧源村の成立と発展―』を刊行した。今回の東金市による刊行は、それらの成果・蓄積を継承して実現したものである。

一 源村の成立にむけて

ここでは、明治二十二（一八八九）年の源村成立以前の連合戸長役場時代の史料を紹介した。史料は全て東金市上布田猪野裕子家文書によるものである。そこで、次に同家文書の発見、調査の詳しい経過を報告しておくものである。

○調査の経緯

平成二十六（二〇一四）年九月、東金市上布田猪野裕子氏より、約三〇〇〇点余の古文書・書籍・書画類が山武市歴史民俗資料館に寄贈された。史料は近世末から昭和前期にわたるものであり、近世の上布田村から明治二十二年の源村の成立、さらに明治三十八年の模範村源村の成立と発展に関する貴重な史料群である。また書画には地元を代表する南画家安川柳溪の大きな屏風や襖絵、さらに明治期の日本を代表する書家日下部鳴鶴、漢詩人小野湖山らの扁額などであった。

東金市上布田の猪野家文書が発見され、山武市歴史民俗資料館が調査し同館に寄贈されるに至るには様々の経緯があった。その契機となったのは東金市上宿の中島きみよ氏が昭和四十七（一九七二）年三月に成東町歴史民俗資料館（当時）に寄贈した張交屏風を再調査したことに始まった。この屏風は受け入れ当初から痛みがあったが、四十年余を経た近年には一段と破損も進み、剥離状態にある史料もかなり出てきた。そこで平成二十五（二〇一三）年九月、史料保存の点から一点毎に分離し、目録を作成し、内容を調査することになった。

その目録は参考資料として紹介した、山武市の調査報告書にある「中島家屏風文書目録」の通りであった。特に注目すべき点が二点あった。一つは上総道学関係の稲葉黙齋、三上是庵の書簡が張込まれていたことであり、他の一つは地元東金福俵の画家安川柳溪の扇面や書簡が張込まれていたことである。

前者については三上是庵書簡の宛名が佐久間泉台であることから山武市湯坂の真行寺家、佐久間家が深く関わっていることが推測された。それは山武市歴史民俗資料館による史料調査により、湯坂区の真行寺家から多数の上総道学関係史料（稲葉黙齋書簡、三上是庵書簡等々）が発見されていたからである。調査の結果屏風の寄贈者中島きみよ氏の夫要氏は湯坂区佐久間家の人であり、東金中島家に婿入りしたことも判明し、この屏風の元来の作成地の一つが湯坂区佐久間家であるものと判明した。

後者の安川柳溪書簡の宛名は上布田猪野多喜二、朔太郎となっており、東金市上布田の猪野家が深く関わって

いることも判明した。東金市教育委員会生涯学習課稗田利恵子氏に依頼し調査したところ、上布田区には古文書史料などを所蔵する旧家、数軒の猪野家が所在し、そのうち猪野裕子家が猪野多喜二、朔太郎父子の子孫であることが判明した。

さらに、屏風の裏打文書を調査したところ、興味深い史料が多く発見されたが、なかでも明治十六年の「道中日記帳」はほぼ復元できた。また、この日記の書き手猪野丹蔵は多喜二の先代であることもわかった。これらの裏打に使用された文書は殆どが猪野家関係のものであり、この屏風も上布田猪野家で作成された可能性が高い。その後の調査で中島家へ婿入りした要氏の母ちかは猪野多喜二の長女であり、湯坂の佐久間家に嫁いでいることも判明した。おそらく、このとき持参した屏風に上総道学関係を追加し、要氏が東金中島家に持参したものであろう。

○猪野家と文書の概要

東金市上布田には近世以来の旧家猪野家が数軒ある。一軒は猪野靖夫家であり、家号を「大」と称し、代々七郎右衛門を襲名し、上布田村の割元名主を務めている。猪野靖夫家文書は平成六（一九九四）年「房総史料調査会」による調査が終了している。もう一軒が猪野裕子家で、家号を「油内」と称し、元々は小川姓であったが、幕末に猪野七郎右衛門（十二代）の弟丹蔵が小川家を継承し、のち猪野姓に変更したものである。従って両家は本家分家の関係になる。

猪野家文書は幕末の当主丹蔵時代からのものである。丹蔵は布田村組頭を務め、薬王寺の檀家惣代や門前での旅宿業など幅広く事業を展開している。近代には布田村用掛を務め、布田村戸長から初代源村長ともなる本家七郎右衛門（甥）の後見役でもあったと思われる、戸長役場関係文書も多数存在する。さらに明治二十三年、源村が成立すると次の多喜二・朔太郎父子は村会議員・上布田区長などを務め、源村役場（村長）通知など役場文書を克明に保存している。また、次の家郷は昭和三〇五年に源村長を務めており、昭和初期の役場文書もあり、猪野裕子家文書は全体として千葉県文書館の所蔵する「旧源村役場文書目録」を補強する意味もあるといえる。

猪野家文書の詳細は、平成二十七（二〇一五）年、山武市が刊行した『旧源村上布田猪野家文書目録 付(1)東金市東金中島家屏風文書目録 (2)今井家文書目録』に掲載されている。

明治十一（一八七八）年、「三新法」が成立し、明治十三（一八八〇）年には町村議会の設置が制度化され、



猪野家長屋門



中島家屏風

地方自治制度の起点となった。史料1「御布達書」く史料7「御布達書」は三新法成立前の第八大区五小区扱所より上布田村用掛に発せられたものであり、さらに近代的行政制度が成立する過程で明治十七（一八八四）年、戸長役場の管轄区域が拡大された。千葉県内でも三町村から六町村以上へと二倍以上に拡大されたことは明治二十二（一八八九）年の町村制への準備となった。源村の場合にも、このときの上布田村外八ヶ村（合計九ヶ村）がそのまま源村となった。上布田村の有力者であった猪野家には源村成立に至る関係文書が残されている。猪野家は同じ上布田の猪野七郎右衛門家の分家であり、この時期の当主猪野丹蔵は初代源村長猪野七郎右衛門の叔父にあたる。史料8「予算議案説明書并二決議案」史料9「上布田村組合規約」は源村成立直前の上布田村外八ヶ村戸長役場の状況を示している。なお、「丹蔵―多喜二―朔太郎」と続く猪野家系譜については山武市刊行の『猪野家文書目録』を参照されたい。

二、源村の成立と発展

明治二十二（一九八九）年の源村成立以後の発展を紹介する。源村は日露戦争中の明治三十八（一九〇五）年二月、「日本帝国ニ於ケル三模範村」として国内外に紹介された著名な「模範村」であり、人々の関心も高い。加えて、平成二十六（二〇一四）年には東金市上布田の猪野裕子家から大量の古文書が発見され、山武市歴史民俗資料館で調査し、平成二十七年には『猪野家文書目録』も刊行された。その中には源村成立前後の貴重な文書も含まれていたもので併せて紹介することにした。次に紹介の各史料について、その概要等を目次に沿って述べる。

(1) 日清戦争前後

現在残されている「源村役場日誌」は明治二十六（一八九三）年十二月からのものであり、昭和二十九年の合併に至るまではほぼ完備している。ここでは史料10～13「役場日誌」の初期の四冊を紹介した。この時期の「役場日誌」は村長をはじめ役場吏員の出勤記録的なもので役場業務に関する記事は少ない。

史料14～16「源村会義案綴込 老く参」は、源村村会議員を務めた猪野多喜二の記録であり、村会招集通知、議案、議事録など「役場日誌」の記録不足を補う貴重な記録である。

(2) 日露戦争前後 — 模範村の成立と発展 —

この時期、源村は政府の地方改良運動推進策のなかで、明治三十八（一九〇五）年「日本帝国ニ於ケル三模範村」と位置づけられ、国の内外から注目され視察団が訪れたり、「役場日誌」の記事も豊富となる。

史料19～24「源村役場日誌」は源村が注目される契機となった明治三十六（一九〇三）年八月内務大臣児玉源太郎の源村視察が行われた明治三十六年度分の「源村役場日誌」から、日露戦争後の地方改良運動の展開される明治四十一（一九〇八）年度分までを紹介した。なお、この時期の地方改良運動の流れを理解する一助として、その経緯を年表風に紹介する。

明治36(1903). 8 内務大臣児玉源太郎源村視察

明治38(1905). 2 源村「日本帝国ニ於ケル三模範村」として紹介される

自治協会の子爵加納久宜（最後の「宮藩主」）ら華族会館に三村長（源村・静岡県稲取村・宮城県生田村）を招待

明治41(1908). 1 戊申詔書(国民に勤勉貯蓄・風俗改善奨励) 発布
 明治42(1909). 2 尚風会結成
 7 第一回地方改良講習会(講師 千葉県知事有吉忠一、子爵加納久宜)
 明治43(1910). 2 全国模範村として28ヶ村表彰(源村も表彰)
 明治44(1911). 5 東宮殿下(大正天皇)来県、成東中学視察、源村にも東宮侍従甘露寺受長派遣
 紙面の都合で明治四十二(一九〇九)年以後の「源村役場日誌」は採録できなかつた。
 史料25「雑件簿」は上布田区长猪野朔太郎の記録であり、日露戦争直後の源村の状況を示している。
 史料26・27「諸達綴込」は上布田区长を務めた猪野朔太郎と源村役場との接渉を示しており、日露戦争直後から模範村として全国的に注目されるようになる。史料28「尚風会趣意」は明治四十一(一九〇八)年発布された戊申詔書に呼応するようになかたちで結成された民間有志(山武・長生中心)による地方改良運動である、尚風会の趣意書及び規則である。その発起人十七名のなかには源村長山本八三郎や薬王寺住職中田日達も名を連ねており、その発会式は明治四十二(一九〇九)年二月、東金町西福寺において挙行された。
 史料29「源村役場ヨリ通知書綴込」は東宮来県の明治四十四(一九一一)年の役場と区长との接渉を示している。

付、東金地域の幕末と明治維新

(1) 真忠組事件

史料 30 「文久太平記」は猪野家文書のひとつである。

「文久太平記」(文久四年南総山辺郡布田村猪野氏写之)と称するこの史料は、幕末に当地方で勃発した真忠組事件の顛末を記した清書本であり、現在までに未発見の真忠組事件に関する情報も含まれている。作者等について記述は一切ない。真忠組事件についてのまとまった著作は東金新宿の名主杉谷直道がまとめた『真忠組騒動実録』が有名であるが、文久期の猪野家当主丹蔵の妹喜美が杉谷直道の妻となっており、その辺にこの文書が猪野家に伝来した事情が隠されているかもしれない。

史料 31 「寄場名主篠原葵白の日記」は、(3)明治維新と東金でも採録した。いずれも東金市堀上の篠原家の流出文書である。そこで、篠原葵白とこの文書の現況を紹介する。なお、この紹介は平成二十七(二〇一五)年、筆者(加藤)が投稿した『千葉県文書館 第20号 篠原葵白日記―東金市堀上篠原家文書―を中心として』からの抜粋である。

東金市堀上の篠原家文書は、昭和四十八年に始まった『東金市史』にも開発史料(家譜)、上総道学、俳諧史料など多くの史料が採録されている。東金市史編纂室の作成した内部資料の「収集古文書(コピー)リスト」にも多くの篠原家文書が掲載されている。なお、東金市史の調査は抽出調査であり、篠原家には大量の未調査文書が存在した。

これらの文書の一部は、平成八年〜十年にかけて三次に亘り、篠原初子氏により千葉県文書館に寄託され、現在調査整理中である。

これと前後して、篠原家文書と思われる古文書が、市内外の骨董市や古書市場に散見され、その情報が筆者にも寄せられた。例えば東金市田間の醍醐氏や東金市台方の久我氏が購入された文書である。これらはいずれも醍醐家文書、久我家文書として千葉県文書館に寄託されている。これらの中で最大の文書群が、平成十二年神田の古書店源喜堂書店の古書目録に写真入りで掲載された篠原家文書である。その説明の一部には「文化頃〜明治期、堀上村割元篠原家文書、諸日記、書簡覚等千通以上」とあり、相当高価な値がつけてあった。結局、この文書群は当時千葉県文書館嘱託であった青木三郎氏、高校教諭として東金高校に在職し、篠原家とも縁があった

が購入し、その後、青木家文書（篠原家旧蔵）として文書館に寄託された。現在文書館として調査整理中であるが、以下の史料紹介は特別閲覧により、筆者が主として日記を調査したものである。

なお、篠原葵白に日記については、最も古い天保九年の日記が平成二十三年に旧松尾町史編さん室から発見された。その経緯にふれておく。筆者は平成十二年以来、成東町の史料調査を依頼され、成東町歴史民俗資料館（伊藤左千夫生家）を拠点として、成東町の「古文書所在目録」「古文書史料集」の刊行に従事してきた。ところが、平成十八年の町村合併により、旧成東町、松尾町、山武町、蓮沼村の四ヶ町村が合併し山武市が成立した。このことにより成東町以外の三町村の史料調査にも従事することになり、平成二十三年には旧松尾町史編さん室の蒐集文書を調査し、古文書目録集を刊行することになった。殆んどがコピー文書であったが、一部原文書が存在し、そのうちの一点が前記の天保九年の篠原葵白の日記であった。旧松尾町域の木刀村、五反田村が堀上村と同じ旗本川口氏の所領であったので、関係史料として入手したのものとされる。なお、川口氏の所領は旧成東町域の富口村、芝原村、草深村、五木田村や千葉市域の小食土村にもあった。

○篠原家と葵白のこと

篠原家は堀上村の草分けであり、近世には代々村役人を歴任し、近代では篠原蔵司が明治二十二年の町村合併により成立した東金町の初代町長に就任し、前後五回町長を歴任するなど政治的社会的にも大きな役割を果たした。『東金市史（総集篇）』（昭和六十二年）の第一篇「人物」には篠原葵白、篠原蔵司の二名が採録されており、その中には篠原惟秀についての記述もある。惟秀は上総道学稲葉黙齋の門人であると共に、白井鳥酔（長南出身）系の俳人でもあり、鶴洲と号した。

次に篠原家の略系譜を「篠原氏系書」（『東金市史、史料篇一』）などにより紹介する。

糸三郎(前夫) 第十代 第十一代 第十二代

安之進、太乙(三瓶) 葵白 蔵之助

篠原お銀

第九代 惟秀(福俵村北田太兵衛次男)稲葉黙齋門人、俳人

第十三代

第十四代

第十五代

蔵司

蔵司

逸平

靖志(現当主)

明治二二初代東金町長 九十九里鉄道社長、俳人 高校教師 医師

また、これから史料紹介する「日記」の書き手篠原葵白(与五右衛門、周徳)の略歴を次に紹介する。

寛政七(一七九五) 山辺郡堀上村に出生

文政二(一八一九) 家督相続

天保七(一八三六) 関東取締出役より東金町組合大惣代、地頭所より割元役

天保一一(一八四〇) 悴与五郎(蔵之助)に名主役、

与五右衛門(葵白)は割元兼地頭所詰役

嘉永三(一八五〇) 東金町に隠居所、葵白と改名、俳諧に専念

安政四(一八五七) 惺庵西馬門下として立机、宗匠の地位

明治一三(一八八〇) 死去、八十四才

○葵白「日記」の所在状況と概要

現段階で筆者の把握している「日記」の所在状況は次の通りである。

※1は旧松尾町史編さん室(山武市松尾町)蔵

13 (ア 39)	12 (ア 71)	11 (ア 92)	10 (ア 46)	9 (ア 62)	8 (ア 61)	7 (ア 89)	6 (ア 63)	5 (ア 68)	4 (ア 52)	3 (ア 67)	2 (ア 69)	1 (No. 1)	史料(目録)番号
諸日記 葵白	諸日記 篠原葵白	諸日記 篠原	諸日記 篠原	諸日記	諸用日記 葵白	諸日記 乙丑五月 葵白	諸日記 甲子二月 葵白	諸日記 葵白	諸日記 式番 葵白	日記 酉中春 葵白	日記 篠原控	諸日記 篠原	表題
明治六年二月一六日 〜七年二月二日	明治五年一月一日 〜六年二月一五日	明治三年一月一日 〜一二月二九日	明治二年一月一日 〜一二月三〇日	慶応四年一月一日 〜明治一年一二月二九日	慶応二年一月一日 〜三年一月九日	慶応一年五月一日 〜一二月二九日	文久四年二月一月 〜元治二年四月三〇日	文久三年一月一日 〜四年一月二九日	文久一年八月一六日 〜二年三月一八日	文久一年二月一六日 〜八月一五日	嘉永六年七月二五日 〜七年七月六日	天保九年七月二四日 〜十年八月二九日	年代

日記は全体で十三冊発見されており、天保九年～十年のものが一冊あり、残りは全て嘉永六年以後、葵白の晩年明治七年までのものである。天保九年～十年の日記には東金町寄場組合惣代や旗本川口氏の割元名主としての活動が広く記されており、天保期の東金町域や木刀村五反田村富口村芝原村草深村五木田村―以上山武市域―や小食土村(千葉市)の状況を知るうえで貴重な史料となろう。さらに篠原家は天保九年頃から酒造を始めており、酒造株の取得をめぐる記事も多い。この日記は、現在刊行中の『山武市史料集』の松尾編として翻刻されている。

嘉永期以後の日記には天保期同様の記事に加えて、次のような特徴的な興味深い記事が豊富にあった。

- (1) 嘉永三年に葵白と改名し、俳諧活動を展開する記事が頻出する。
- (2) 文久三年十二月に当地方で起った真忠組事件と、その後の裁判状況を示す記事が当事者の記録として多
出する。

- (3) 当地方における幕末維新期の動乱状況を示す記事も多い。

そこで、以上のうち(2)と(3)の二点に焦点を合せて日記(抄出)を紹介した。

真忠組事件については、大量の史料が残っており、『東金市史』をはじめとする自治体史に多くの史料が採録されている。篠原家文書のなかからも『東金市史 史料篇一』に「白里曙」が採録されている。しかし、その多くはのちの記録である。

この葵白の日記は同時進行の記録であり、事件終結後の西福寺を臨時の評定所とする詮議の様子も記録されている。当時葵白は西福寺の一角に隠居所を構えており、詮議にも書記役として係っているため、この日記の記録は貴重であろう。

史料32「真忠組没収品預り一札」は東金市東金能勢家の流出文書である。流出の経緯は不明であるが、大分以前に筆者(加藤)が東京の古書店から購入したものである。能勢家は県内でも最も古い書店の一つ多田屋の創業家であるが、この古書群は能勢家が書店経営以前の医師時代や書店経営初期の史料であった。一応の調査終了後、千葉県文書館に寄贈し、現在は文書館に収蔵されている。いずれ目録も刊行され、公開されることであろう。

(2) 新徴組の活動

史料33「伊東滝三郎略歴」史料34「見廻日記」は、九十九里町片貝高山幸洋家文書である。伊東滝三郎は川場村（東金市）の出身であるが、伊東家は何回か移住し、その子孫が高山家に嫁いで、史料の一部が伝来したものである。

幕末維新の歴史を振り返るとき必ず話題となるのが新選組のことである。その新選組の最後の生存者が、昭和十三（一九三八）年まで生きた東金出身の稗田利八（池田七三郎）であることは有名である。作家子母沢寛の「新撰組物語」などにもその回想が記されている。但し、稗田は慶応三（一八六七）年十月、土方歳三による江戸での新選組募集に応じたものであり、元治元（一八六四）年の池田屋事件後であることは勿論、慶応三年の大政奉還直後のことであった。

新選組はもとと清川八郎の奇策により幕府が募集した浪士組の分れであり、浪士組の大部分は新徴組となり、京都、江戸から庄内へと移動し、苦難の維新に遭遇している。新徴組の最後の地となったのは、鶴岡市郊外湯田川温泉であった。隊士たちはその地に分宿した。その名簿には伊東滝三郎の名はなかったが、養子として伊東滝三郎の名があった。滝三郎は照内への転戦のなかで戦死したのであろうか。なお、湯田川温泉裏手の山にある墓地には庄内で戦士した隊士の墓石があり、地元の人たちにより香華が手向けられている。

このような浪士組、新徴組の隊士に川場村（東金市川場）の伊東滝三郎が在籍し、その子孫のもとに「伊東滝三郎略歴」「見廻日誌」などが残されていた。

この史料により、伊東滝三郎の新徴組参加の経緯と清川八郎暗殺後の浪士組（新徴組）の動静も一部判明する。

(3) 明治維新と東金

史料35「寄場名主篠原葵白の日記」は、さきに紹介した篠原家文書であり、慶応四（一八六八）年一月から六月まで、激動の時代の東金周辺の状況を示す部分を紹介した。

この日記には、新政府の先鋒副総督柳原前光を迎え、混乱する佐倉藩や船橋、木更津辺の房総戦争の情報が真偽とりまぜて伝来し、庶民の動乱期における緊張した東金地域の様子がリアルに描かれている。